

『代表的日本人』について：日本とキリスト教との の交わりという視点から

著者	佐藤 明
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	17
ページ	115-137
発行年	2020-03-25
URL	http://doi.org/10.15002/00023217

『代表的日本人』について

—日本とキリスト教との交わりという視点から—

佐 藤 明

序論

内村鑑三は、日清戦争の最中である 1894（明治 27）年 11 月に『日本および日本人』（*Japan and The Japanese*）を英文で出版した。収録されている作品は、「国土と国民」（“The Land and The People”）、五人の日本人（西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮）の評伝、「太平洋の禁酒島」（“A Temperance Island of The Pacific”）、「日本国の天職」（“Japan: Its Mission”）、「日清戦争の義」（“Justification of The Corian War”）である。このうち五人の評伝のみを独立させた形として、『代表的日本人』（*The Representative Men of Japan*）が日露戦争を経た 1908（明治 41）年に出版された。その他の四編が削除されたのは、内村の義戦論から非戦論への変化が原因とされる。また評伝においてもその変化を反映して削除された部分がある。

先行研究では、本作品は日本がキリスト教を文明の基準とする西洋から低く見られることに対して、日本の道徳はキリスト教に劣らないどころか日本の方がむしろキリスト教的であることを誇示するものとしてとらえられてきた^①。それに対して本研究では、本作品が西洋に対して日本の優れた点を示すことに変わりはないが、それが単なる西洋との優劣の比較を超えて、キリスト者としての内村が世界の現状に警鐘を鳴らし日本によってそれを打開していく可能性を説くものであることを明らかにしたい。その方法として①二つの版を比較して、一貫しているものは何なのか②その一貫したものは日本の何に由来するのか③日本が世界の現状を打開するためにはその日本由来のものに加えて何が必要だとされているのかという三点から考察する。なお翻訳

は数種類あるが、本研究では 1894 年版に 1908 年版の削除箇所が明記してある内村美代子による翻訳を主に用いた⁽²⁾。

第 1 章 二つの版の相違

① 1894 年版における評伝以外の作品について

「序文」は黄海海戦の勝利の翌日に書かれたが、そこにある「わが国の主要な人物をただしく評価する上に、この書が幾分の助けともなればと願う」[内村 1968:5] とか「日本を駆け足見学した外国人旅行者が、この国について書きまくる時代にあっては「国産」とてあながち捨てたものであるまい」[内村 1968:5] という表現から本書の中心が五人の日本人の紹介にあり、全体の目的が外国人に対して本当の日本を理解してもらうことにあることがわかる。次の「国土と国民」(“The Land and The People”) は後に続く五人の日本人の評伝に対する序論的扱いである。日本の開国を自分たちの不完全さを認める機会であったと評価した上で、完全な国民になるために日本人の長所と短所の分析がなされる。五人の評伝を記す目的は「日本国は子供の樂園」[内村 1968:32] だとみなし治外法権の恥辱を与えた「大多数のキリスト教国民」[内村 1968:32] に対して「大和魂」[内村 1968:32] を紹介して「世界の最高の一つなるこの国を扱うに、より思慮深くあれ」[内村 1968:32] と教えるためであるとする。

五人の評伝の後に続く「太平洋の禁酒島」(“A Temperance Island of The Pacific”) は、北海道の奥尻島が禁酒により貧しい状態から脱したことを述べる。そして最もキリスト教的な国であるはずのアメリカが禁酒と戦う一方でアフリカに酒を売ろうとしている現状に対して、日本の方がキリスト教的だということを示そうとしている。次に続く「日本国の天職」(“Japan: Its Mission”) は、全身全力で神と国に尽くすことを述べるが、「自国を以て万国の中華と見做すものは亦国民中最も弱く最も進歩せざるものなり」[内村 1981:286] という認識を示し、「各国民にも是に特別な天職あつて全地球の進歩を補翼すべきものなり」[内村 1981:286] とする。そして世界各国の価値を対等だとする見方に立った上で、日本の役割を「東西両岸の中裁人器械的の欧米をして理想的の垂細垂に紹介せんと欲し進取的の西洋を以て保守的の東洋を開かんと欲す

是日本帝国の天職と信ずるなり」[内村 1981:293] とする。最後に付録として掲げられたのは、「日清戦争の義」(“Justification of The Corian War”)である。内村は、「人類が地球表面に正義を建つるの目的を以て戦場に趣きし時代は早や既に過ぎ去りしが如し、此物質的時代の人は、其戦争の悉く慾の戦争たるを承認する」[内村 1982:104] という時代認識を示した上で、日清戦争は義戦であることを欧米人に明らかにしようとした。さらに「基督教国已に義戦を忘却する今日に当りて非基督教国たる日本の之に従事するを怪むものあらん、然れども非基督教国若し無智ならば彼等は未だ誠実なり、基督教国が其迷信と同時に忘却せし熱心は吾人の未だ棄てざる所、吾人に一種の義侠あり」[内村 1982:105] として日本は西洋の忘れた義戦を戦えることを説く。内村にとって義戦とは侵略や圧政、そして尊厳を傷つける行為に対する戦いであった⁽³⁾。したがって日清戦争開戦の理由を明治 15 年以來の清の日本に対する行為すなわち朝鮮に対する日本の平和的攻略を妨害し恥辱を与えたことにあるとする⁽⁴⁾。その際かつての西郷の征韓論も恥辱に対する憤りからくるものだと引き合いに出している。また清は世界の隠遁国であるにもかかわらず朝鮮を属国として進歩を妨げており、「自由を愛し人權を尊重するもの」[内村 1982:107] はこの状態を放っておくわけにはいかないとする。そして日本が清を覚醒させ協力して東洋の改革に従事することが永久の平和につながるとする。したがって「基督教国を以て誇称する欧米諸国が此世界の犬患を地球面上より排除せん為め吾人に率先せざりし事を」[内村 1982:107] とするように、日清戦争に西洋の協力を求める姿勢はなかった。

② 1908 年版の変更点について

1908 年版は、五人の評伝のみを『代表的日本人』(*The Representative Men of Japan*)と改題して出版された。序文には「余が今なお我が国人の善き諸性質—普通に我が国民の性質と考えられてゐる盲目なる忠誠心と血腥い愛国心を除いた其以外の諸性質—を外なる世界に知らしむの一助となさん」[内村 1941:5]⁽⁵⁾ という目的で本書を再版したことが述べられている。この序文の「今なお」という言葉から内村が評伝を通して伝えようとしている日本国民の性質自体は旧版から変わらないことがわかる。しかしその中でもやはり義戦論から

非戦論への思想上の変化が反映しているところがある。それは西郷と上杉からの削除箇所にも顕著だが、人物評価の変化は西郷のみに認められる。まず西郷についての記述から削除された部分について述べたい。内村は義戦であると信じた日清戦争が実は自国の領土拡大を狙う欲のための戦いであることに失望しただけではなく、キリスト教信仰の深まりによって義戦論からしだいに非戦論をとるようになった⁽⁶⁾。したがって征韓論が採用されなかったことを嘆く部分は削除された。また西郷や明治維新や日本への評価を述べた評伝の最後の部分は大幅に削除された。西郷の評価については、他の部分には武士としての生き方自体に対する高い評価を残しながらもこの部分からは「武士の中の最後にして最大の者」[内村 1968:73] や「輝く明けの明星」[内村 1968:73] という部分を削除し総合的評価を弱めている。

明治維新については「明治維新は、卑劣な精神や下等な必要性から生み出されたものではなく、また私利私欲から生じたものでもない」[内村 1968:73-74] という部分を削除している。さらに日本を西洋と違って義戦を戦いうる国家すなわちよりキリスト教的な国家だとする見方を表した「『正義に基づいて建てられた国家こそ、キリスト教国家と呼ばれるべきではあるまいか?』」[内村 1968:74] という部分を削除している。

次に上杉についての記述から削除された部分について述べたい。内村は上杉の封建制を神の国に近い理想的な制度と考えており、近代の立憲制が必ずしも完全なものでないことを説いている。1894 年版でも 1908 年版でもそのこと自体に変化はない。そこには人間を解放する目的で立憲制を採用したものの、それが利己主義を助長する方向に進んでいる近代の西洋のあり方やそれに巻き込まれていく明治政府への批判がある。しかし 1908 年版では、立憲制を批判し封建制を評価する三箇所が削除された。そこでは、立憲制が性悪説に基づき封建制が性善説に基づくことが強調されているが、それらを削除したのは内村が日清戦争と日露戦争によって人間の性質には悪の部分が多いことを思い知ったことを反映していると思われる。そのため残された部分は、封建制に対する高い評価を残しつつも過度の評価を抑制し、それが圧制政治をもたらすものとして廃止されたことにも言及するものとなった。このことは、

内村の考えが権力を抑制する機能を持つ立憲制を正しく運用しながら封建制の長所を生かすことにあることを示しているといえよう。このように内村は義戦論の立場から日本の優越性を説く部分や戦争を肯定する部分を1908年版の評伝からも削除した。

第2章 日本人の国民性とキリスト教との類似と西洋近代の問題点

前章では1908年版で削除された部分の内容について考察し、義戦論の立場から日本の優越性を説く部分や戦争を肯定する部分が削除されたことを確認した。それでは評伝のみとなった1908年版においては、1894年版の削除された部分にみられた西洋近代に対する批判的な見方や日本を西洋近代よりキリスト教的だとする見方はどのようになっているのだろうか。本章ではそれについて考察したい。評伝においては五人の代表的日本人の業績とキリスト教との比較を通して、日本がキリスト教を受け入れる下地を持つことが示される。まずそれを各人物に即して整理してみる。

西郷について論じた章では「敬天愛人」〔内村1968:63〕の精神とキリスト教そのものを比較している。西郷の「天は、すべての人を平等に愛したもう。それゆえに、われわれは、自身を愛するにひとしい愛をもって、他の人を愛さねばならぬ」〔内村1968:64〕という言葉は、「律法と預言者とに関するすべてを言い尽くしたものである」〔内村1968:64〕とする。また西郷の経済観とキリスト教の経済観を比較している。西郷の書いた評論「富の生涯」にある「徳を治めようと努める人には、おのずから富が集まる〔内村1968:71〕という言葉をはじめとする経済観は、聖書の箴言にある「施し散らして、増す者あり、与うべきを惜しみて、かえりて貧しきに至る者あり」〔内村1968:72〕という言葉やマタイ福音書の「まず神の国と、その義とを求めよ。さらば、これらのものはみな、なんじらに加えらるべし」〔内村1968:72〕という言葉の「適切な注解」〔内村1968:72〕ではないかと述べている。上杉について論じた章では、彼の藩に浸透していた封建制度をキリスト教と比較し、封建制度は「神の国」〔内村1968:76〕によく似ているとされている。封建制度について「自己犠牲のうるわしい精神が、残りなく発揮されるのは「仕えるべき“わが主君”、また

は心にかけてやるべき“わが臣下”を持つ場合に限られる。封建制度の強みは、治める者と治められる者との間に、この“人間的な”つながりがある点」[内村 1968:79] だとする。そして聖書にも「未来の約束の国において、われわれは、“わが”民よ」と呼ばれ、“なんじ”のむちと、“なんじ”のつえ」とがわれらを慰めるであろうと書いてあるではないか？」[内村 1968:79] とする。二宮について論じた章では、彼の経済観とピューリタンの経済観を比較している。二宮が“道徳の力”にたよって経済方面の改革」[内村 1968:121] を行ったことを「尊徳のうちにはピューリタンの血が通っているように見えた」[内村 1968:122] としている。それは二宮が荒廃した農村の復興を任された時に、仁術（愛のわざ）のみが民を救い再び平和をもたらすとして、民に対する金銭的援助を撤回し「愛と、勤勉と、自ら助けること」[内村 1968:121] という三つの徳を厳しく実行させたことによるとする。中江について論じた章では、旧日本の学校における師弟関係と聖書における主と弟子たちとの関係を比較している。旧日本の学校においては「教師と生徒の間柄も、この上なく密接」[内村 1968:153] で“先生”のため命を捨てることは“弟子”たる者の最高の徳と考えられていた」[1968:154] ので、「弟子は師にまさらず、しもべは主にまさらぬこと、良き羊飼いは、羊のために命をも惜しまぬこと、その他これに類した言葉を聖書の中に見出したとき、われわれは、それを、自分たちが、ずっと昔から知っていた真理として、すんなり受け入れました」[内村 1968:154] とする。日蓮について論じた章では、日蓮とマルチン・ルーテルの求道的な態度を比較している。日蓮は、仏教の真理を求めて血を吐くような苦闘の末、仏陀の残した經典に依ってのみ解決することを決めた。その姿は、やはりキリスト教の真理をつかむために意識を失うほど苦悩して聖書に解決を見出したルーテルのことを思い起こさせるとしている。

以上五人の代表的日本人とキリスト教との比較がみられる箇所についてまとめてみた。これらによって、内村は日本がキリスト教を受け入れる下地を持つことを示している。そして内村が各人物の業績とキリスト教とが重なり合うとしているところは、内村の言葉によれば「自己犠牲のうるわしい精神」[内村 1968:79] と「経済を道徳と切り離して取り扱わなかった点」[内村 1968:95] だといえる。それは結局社会との関係においては＜利他主義（無私）＞でモ

ノとの関係では＜精神主義（無欲）＞ということである。そしてこの日本とキリスト教との親和性は、現在西洋が置かれている状況をはるかに超えて日本をキリスト教にふさわしいものになっていると内村は考えた。その現在西洋が置かれている嘆かわしい状況とは、日本とキリスト教との親和性を形成する要素とは反対の状況、つまり利己主義と物質主義である。

内村は、西洋近代の利己主義と物質主義が起こした事件を次のように述べる。利己主義については「インドは比較的に世界に接近しやすかったために、たやすくヨーロッパの利己心の餌食となってしまった。インカ帝国や、モンテズマの平和の国は、世界によってどんな目にあわされたか？」[内村 1968:35]として西洋近代におけるアジアやアメリカ大陸に対する侵略行為を批判する。また物質主義については「「パナマ疑獄事件」を目前に見て、この巨大な事業の失敗の原因が主として道徳的なものであったことを見落とす人があるであろうか？」[内村 1968:145]として西洋近代の道徳的腐敗を批判する。そして利己主義や物質主義につながる西洋近代の思想や制度をあげている。利己主義につながる思想については「近代ベンタム主義者（功利主義者）」[内村 1968:72]、「快樂主義的な幸福観」[内村 1968:96]、「西洋伝来の「幸福至上主義」」[内村 1968:122]をあげている。制度については「アメリカその他の土地で農民ギルドと呼ばれているものは、自己の利益を主たる目的とする産業協同組合にすぎない」[内村 1968:100]とか「適者生存の原理に基づく当世流の教育制度は人類愛にあふれた寛容な君子（紳士）を作るのには不適當のものと考えられていました」[内村 1968:153]と述べている。さらに立憲政治については「聖人を助けるよりも、盗人を縛るに適したものであって、代議政体とは、進歩した警察制度の一種だと、私は考える」[内村 1968:78]としてネガティブな面について述べている。物質主義につながる制度としては、やはり西洋近代の教育制度について「学校が知的の年季奉公をする所」[内村 1968:151]だと批判している。また、「科学」については「現代のわれわれは、非科学的であることを恐れて臆病な人間となり、目に見えるものによってしか行動できない」[内村 1968:193]として、立憲政治と同様ネガティブな面をあげている。さらに近代日本に西洋から入って来たキリスト教の宣教師についても、キリスト教の美点である＜利他主義＞や＜精神主義＞が見られなくなっていることにつ

いて日蓮との比較で述べている。「たとえ彼が聖書を日日、口に唱え、聖書から得た靈感に燃えていたとしても、彼ははたして聖書の宣伝者としての使命のために、十五年にわたる剣難と流刑とに堪え、その生命と靈魂とを危険にさらすことができるであろうか」[内村 1968:224] という言葉は、信仰のためなら自らも犠牲にするという利他的な態度が見られなくなっていることへの批判だと思われる。また「愛嬌、卑下、ほしがり屋、物乞い性というような名で呼ばれるものは、国家の恥辱にほかならず、それはただ本国へ報告する「回心者」の数をふやすのに都合のよいものであるにすぎない」[内村 1968:226] という言葉は、信者の数を増やすことが重視され信仰の精神的な面が軽視されていることへの批判だと思われる。

内村はキリスト教国であるはずの西洋諸国が、キリストの教えから離れてこのような嘆かわしい状況にあるのに対して、日本にもともと内在していた日本独自の特徴にこそそうした西洋近代に勝るものがあるとしてそれを強調している。そのことについて内村がどう示しているのかについて五人に即して整理してみたい。

西郷について論じた章では、西郷が征韓論の際にまず自分が使節として朝鮮に派遣されることを望んだ自己犠牲の精神を評価している。「この使節の責任は重く、また極度の危険を覚悟せねばならぬから、この役目には是非、自分を当たらせてもらいたいと、西郷は主張した。国民の前に征服の道を開くために、まず征服者自身が自分の命を投げ出そうというのである！このような方法で企てられた征服が、かつて歴史上に見られたであろうか」[内村 1968:52] と述べている。上杉について論じた章では、上杉が幼少期に学んだ経済観を評価している。「東洋的考えの一つの美しい特徴は、経済を道徳と切り離して取り扱わなかった点である。(中略)「それゆえ、偉人は、木を思って実を得るが、小人は、まず実のことを思うがゆえに、実を得ることが出来ない」という孔子の教えは、恩師、細井によって、鷹山の心に刻みこまれていたのである」[内村 1968:95] と述べている。二宮について論じた章では、二宮の経済観を評価している。ピューリタンとの共通性を述べた直後に「いや、むしろ彼は、西洋伝来の「幸福至上主義」に汚されぬ真正の日本人であったと言うべきであろう」[内村 1968:122] と述べている。中江について論じた章では、旧日本の学校制

度の方針を評価している。「われわれが学校にやらされたのは、卒業の後に生活費をかせぎ出すためというよりは、むしろ“真の人間”、われわれの言葉でいえば、“君子”になるためでありました」〔内村 1968:151〕と述べている。また「われわれは、クラス別に学ぶこともありませんでした。魂を持った人間を、オーストラリアの農場の羊よろしく、クラス分けする制度は、旧日本の学校にはなかったのです。われわれの教師は、人間とは分類できない者であり、誰しもが個人として、すなわち、顔と顔、魂と魂をつき合わせるようにして扱われなければならぬ者であることを、本能的に知っていたと、私は思うのです。それゆえ、教師たちは、生徒一人一人を対象に、それぞれの肉体的、知能的、精神的特性に応じた教え方をしました」〔内村 1968:152-153〕と述べている。日蓮について論じた章では、日蓮の終始一貫した布教態度を評価している。「彼に付随している知識上の誤りや、生来の気性や、時代の影響を取り去った彼自身は、心の底まで真実な魂、最も正直な人、最も勇敢な日本人である。二十五年以上も偽善を続けられる偽善者などがあるものではなく、また偽善者は、彼のために命を投げ出そうとする何千人もの崇拜者を集めることなどはできない」〔内村 1968:206〕と述べている。

これらのことから内村は、西洋近代に勝る美点としての＜利他主義＞と＜精神主義＞はもともと日本に内在しており、それが日本独自のものであることを強調しているといえる。そしてそれこそが日本をキリスト教との関係で西洋近代に勝っているとしているのであり、その見方については義戦論を掲げた 1894 年版においても非戦論をとるようになった 1908 年版においても一貫しているのである。

第 3 章 西洋近代の悪を克服する源泉としての武士道

それでは、日本をキリスト教にふさわしいものとし、その点で西洋に勝るものとしているもの、その出どころは何なのか。本書にはそれが次のように示されている。

われわれはまだ母のひざの上にいたころ、われわれは少なくとも十戒の

内八つまでを父の口から学んだと信じます。すなわち、力は正義では“ない”こと、宇宙は利己主義の上に立つものでは“ない”こと、いかなる形を取ろうとも、盗みは正しく“ない”こと、生命と財産とは、われわれの究極の目的とすべきものでは“ない”こと、その他多くの事どもです。[内村 1968:150-151]

まさにここから、日本の教育が西洋近代の利己主義や物質主義を嫌悪するものであることがわかる。さらに 1908 年に出版された本書のドイツ語版に寄せた後記における内村の言葉を見てみたい。そこでは自分が誇りとする精神を次のように述べている。

正に一人の武士の子たるの余に相応はしきは、自尊と独立である。権謀術数と詐欺不誠実との嫌悪者たることである。武士の掟は、『金銭を愛するは、もろもろの悪の根なり』という基督教の律法に劣らざるものである。[内村 1941:13-14]

この言葉から、内村が誇りとする日本の精神が武士道であることがわかる。そしてその特徴とはやはり自分のためより人のためという＜利他主義（無私）＞やモノに支配されない＜精神主義（無欲）＞と重なる。しかも武士道の＜利他主義（無私）＞においては一般的には矛盾するとも思われる自尊心と滅私奉公が不可分に結びついている。内村はそれを「武士の中の最大の者」[内村 1968:58]として武士としての生き方を高く評価する西郷の中に強く見出している。すなわち西郷の行動は「心が清く、動機が高くあるならば、会議の席であろうと、戦場であろうと必要な時には、いつでも道が開けるであろう」[内村 1968:64]という信念に貫かれたものであったとすることで、武士道においては私利私欲のない行動と自己の人格と威厳を保つことが両立することを示していると思われる。そのことは「至誠の王国は、人目に触れぬ密室にある。一人居る時強い者は、どこに居ようとも強い者である」[内村 1968:64]や「人は自分自身に勝つことによって成功し、自身を愛することによって失敗する」[内村 1968:64]という西郷の言葉を引用することからもわかる。つまり誠実で

あるためには独立心がなければならないし、成功するためには自分自身に執着してはならないということである。武士道の独立心には公の利益のためには世間の風潮に逆らっても志を貫く気概があるといえる⁽⁷⁾。また武士道の＜精神主義（無欲）＞では節約や儉約といった要素が重視される。それは大きな目的のためには物質的満足にはこだわらないということの表れであり、西洋近代には見られなくなったものである。これらについて五人の具体的な事例に即して整理してみたい。まず＜利他主義（自尊心・滅私奉公）＞は以下のように整理できる。

西郷の自尊心については、征韓論で下野したことをあげる。正義に基づいて計画された韓国派遣の話が閣議でいったん決定されたにもかかわらず、正義よりも文明の快楽と幸福を重視する岩倉や大久保や木戸の卑怯な手段によって撤回されたことに憤り腐敗した政府を自ら去ったことをあげる。そして征韓論の禁圧以来、「柔弱な風も生じ、決然たる行為を避け、明白な正義を犠牲にしても平和に執着するなどの、真の武士を嘆かせる風潮が、ひろがって行った」〔内村 1968:54〕と述べる。滅私奉公については「完全な犠牲の精神こそ、彼の勇気の秘訣であったということは、次の重大な発言によって知られる」〔内村 1968:65〕とする。そして「命も、名も、地位も、金も要らぬ人ほど扱いにくいものはない。しかしこういう人と共にでなければ、人生の苦しみを分かち合うことはできず、また、こういう人のみが、国家に大きな貢献をすることができる」〔内村 1968:65〕という言葉を用いる。

上杉の自尊心については、わずか十七歳で崩壊寸前となっていた米沢藩の家督を相続したにもかかわらず、自分にゆだねられた領土と領民とを生きかえらせることができるという希望を失わなかったことを述べる。滅私奉公については「骨身惜しまず働いた節制家の鷹山は、七十年間、変わらぬ健康に恵まれ、青春時代の大志の大方を実現させた。一すなわち、彼の藩が確固たる基盤の上に立ち、領民の生活が十分に安定し、領国全体が豊かに甦るのを、彼はその目で見たのである」〔内村 1968:107-108〕とある。

二宮の自尊心については、叔父の家に身を寄せる貧しい孤児であったが、家の仕事が休みの日にも働き道を切り拓いたことをあげる。「謙虚な努力の報いとして、生まれて初めて、その生活の糧を得た孤児の喜びは察するに余りある。

そして、この年に収穫した米こそは、その後の彼の多事な生涯を始める資金となったのであった。真に独立の人とは彼のことだ!」[内村 1968:117]とある。減私奉公については、荒廃した三村の復興を任された時「数千の家を救おうと思えば、わが家を犠牲にするほかはない」[内村 1968:122]として、祖先伝来の資産を回復する仕事を放棄して故郷の村を後にしたことをあげる。

中江の自尊心については、「この国の片田舎に根をすえて、彼は、平和にあふれる生涯を、その死に至るまで、楽しんだ。まもなく、わかることだが、彼の名が世間に知られるようになったのはほんの偶然のことからである。評判を立てられることを、彼は何よりもきらった。彼にとっては、彼の心こそ彼の王国であり、彼は自分自身の中に、自分のすべて、否、それ以上を有していた」[内村 1968:163-164]とある。減私奉公については、「彼が、村の出来事につねに関心を持っていたこと、村の裁判所に訴えられた村人のために、とりなしをしたこと、自分をのせた“駕籠”かきにさえ、「人の道」を教えたことなど、彼にまつわる幾つかの話を、純な村人は語り伝えている」[内村 1968:164]とある。

日蓮の自尊心については「彼はただひとり、独力で出発した。あらゆる種類の権力と対立し、当時の有力な諸宗派と根本的に相容れない見解を携えての出発であった」[内村 1968:206]とある。減私奉公については、布教における幾度かの危機に際して「もし法華経のために死ぬことができたなら、わが生命は少しも惜しくない」[内村 1968:224]という言葉を発したとある。

次に＜精神主義（節約・儉約）＞は以下ようになる。西郷については、「日本陸軍の総司令官、近衛総督、大臣中の最有力者という榮譽を身に帯びながら、彼の外見は、普通の兵卒と異ならなかった。数百円の月給のうち、十五円あれば十分だとして、残りのすべては、困っている人に快く分けてやった」[内村 1968:59-60]とある。上杉については、「彼は木綿の衣服と粗末な食事との習慣を、藩庫の信用が回復し、自由に多額の金が使えるようになったその晩年まで続けた」[内村 1968:104]とある。二宮については、「今やこの三村は、以前の繁栄の時と同じく、年収一万俵の米を産するようになったばかりか、何年続く飢饉に堪えられるほど、穀物の満ち満ちた倉庫を幾棟か、持つまでになった。そして喜ばしいことは、彼自身もまた、この地で数千金の蓄えを得、後年、

これを、思うまま、慈善のために使ったのである」[内村 1968:129-130] とある。中江については、「その外見の貧しさと単純さとはうらはらに、藤樹の内面は豊かで、また変化に富んでいた」[内村 1968:172] とある。そして「まことに彼こそは、天使のような人について、よく言われる、「九分が靈魂で、一分のみが肉体」という言葉で評すべき人であろう」[内村 1968:173] としている。日蓮については、「日蓮の生活は簡素をきわめたものであった。鎌倉に草庵を構えてから三十年の月日経ち、その間には、富んだ俗人の幾人かも弟子に加わって、安楽な生活は望むがままであったにもかかわらず、彼は身延におけると同様の草庵の生活を変えなかった」[内村 1968:225] とある。

以上から、武士道における＜利他主義（自尊独立・滅私奉公）＞と＜精神主義（節約・儉約）＞は、五人に共通していることがわかる。また＜利他主義＞につながるものとして、五人には共通して弱者への思いやりが見られることも重要である。西郷は無辜の民を救うために江戸城無血開城に応じた。上杉は、若くして結婚させられた妻が十歳の知能しか備えなかったにもかかわらず、心からの愛と尊敬をもって彼女に接し、二十年に及ぶ結婚生活中一度も不満を示したことはなかった。二宮は、三村の復興を任された時、年老いて一人前の仕事かむずかしくなった農夫が「木の根っこ掘り」[内村 1968:124] という骨が折れて目立たぬ仕事に精を出すのを評価した。中江は、配偶者となった婦人が肉体的にあまり美しくないことから母親に再婚をすすめられたにもかかわらず従わなかった。日蓮は、「貧しい者や悩める者には、この上なく優しかった」[内村 1968:225] とある。さらにここで武士道とされるものが特権階級としての武士に限るものでないことは、二宮や日蓮の例や、武士としての教育を受けた三人の精神が様々な人に伝わっていることが本作品の中に示されていることからいえる。西郷については、涙とともに彼の墓を訪れる人が絶えないことが描かれている。上杉については、彼の藩では彼の教えが行き渡り正札市というシステム（正札という値札と商品のみが置かれた売り手のいない場所で買い手が正札通りの金額を払って商品を持ち去る商取引）がきちんと成り立っていたことが描かれている。中江については、彼の村でも彼の教育によって武士が馬に大金をくくりつけたまま馬子に馬を返しても馬子はそのお金を返しに来るばかりかお礼も辞退するという光景が見られたことが描かれてい

る。内村は、本作品を通して＜利他主義＞や＜精神主義＞に生きた五人を讀めるだけでなく、その精神が広く普及している日本を描こうとしたのである。こうしてここまでで、日本がキリスト教を受け入れる準備ができていること、さらにキリスト教との関係で、日本が西洋近代に勝っていることが確認され、それらの原因としてあるのが武士道であることが明らかになった。しかし武士道がそこまで優れたものならば、日本は武士道を続ければよいのであってキリスト教など必要ないのではないのかという問題が残る。次章ではこの問題について考察する。

第4章 キリスト教受容が開く日本の可能性とその日本が開く世界の可能性

前章では日本においては武士道がキリスト教を受け入れる下地としてあり、それがキリスト教との関係で西洋近代に勝るものであることを確認した。しかし内村は武士道がそのままで十分であるとは考えなかった。そのことを1908年のドイツ語版後記では次のように述べている。

武士道もしくは日本の道徳は、キリスト教そのものよりも高く優れている、したがって、それで十分だなどと思ひ込んではありません。武士道はたしかに立派であります。それでもやはり、この世の一道徳に過ぎないのであります。その価値は、スパルタの道徳またはストア派の信仰と同じものです。それにより、リクルゴスやキケロのような人物を産むことができるであります。しかしカール大帝やグラッドストーンのような人物は産み出せません。武士道では、人を回心させ、その人を新しい創造者、赦された罪人とする事は決してできないのであります。[内村 1995:182-183]

ここで内村は、武士道とストア派についてそれらは立派ではあるものの現世的道徳に過ぎないとしている。この内村の見方について考察するために、前田英樹の先行研究『信徒内村鑑三』を参照してみたい。そこでは内村が生涯

説き続けたキリストのあり方とベルクソンが『道徳と宗教の二源泉』で示すキリスト像が類似しているとされる。前田はそれについてまず「人類愛」と「祖国愛」の相違から説き起こす。そしてこれについてのベルクソンの見解を次のように示す。

アンリ・ベルクソンは、『道徳と宗教の二源泉』（1932）のなかで、「人類愛」を「祖国愛」の拡張されたものと考えることの根本的誤りを指摘している。家族、村、祖国といったような「共同体」への愛は、そういった拡張の論理で説明できる。これら社会の共同体は、知性動物である人間が、やはりそれ固有の巣や群れを成してしか生きられないところから作られてくる。人間種が所属する共同体は、群れの有用な行動や防禦のために形作られ、その性質は本来閉じられたものである。家族愛が郷土愛に拡張されるとしても、その閉じられた性質は変わることがない。愛する自分の村は、他の村と対立、競合し、原理として相容れない。村々の損得が、国家という単位で組織されるなら、郷土愛は、祖国愛に広がる。けれども、愛する祖国の成立は、他の国家の成立と、やはり原理として対立する。社会の共同体は、もともとそうした対立に備えて作り出されるものだから。祖国愛は、それがどんなにこまやかな情愛から成り立ってようと、他の国家との衝突を避けがたくする。〔前田 2011:186〕

この前田の解釈には、ベルクソンが「「人類愛」を「祖国愛」の拡張されたものと考えることの根本的な誤り」〔前田 2011:186〕を指摘した理由が「知性動物」〔前田 2011:186〕としての人間の限界によるものであることが示されている。それはまたベルクソンが同著の中で、ストア派について語ることと同様の意味を持っている。それによればストア派の教説は、「自ら世界市民であると宣言し、すべての人々は皆同じ神から生まれ出たものであるから皆兄弟だ」〔ベルクソン 1953:73〕という「キリストの言葉とほとんど同じもの」〔ベルクソン 1953:73〕をもっていたにもかかわらず、「本質的には哲学」〔ベルクソン 1953:74〕であったために、「静的なものから動的なものへ飛躍の欠如した状態」〔ベルクソン 1953:74〕にあったとある。つまりここでいう「静的なもの」〔ベ

ルクソン 1953:73] とは「知性動物」[前田 2011:186] としての限界を持つ人間によって形成される群れの有用や防禦のための「共同体」を示す。ベルクソンはそれを「閉じた社会」[ベルクソン 1953:37] とする。それに対して「動的なもの」[ベルクソン 1953:74] とは、全人類という「開いた社会」[ベルクソン 1953:37] である。こうしたことをふまえてさらに前田の解釈を見てみると「静的なものから動的なものへの飛躍」[ベルクソン 1953:74] という問題が明らかになる。

「人類」は、共同体を表す概念ではない。この観念の発生には、共同体とはまったく別の起源をもつひとつの「宗教的情動」が働いている、というのがベルクソンの考えである。その情動は、共同体の閉じられた性質を、一挙に内側から開く力を持っていた。祖国愛の単なる拡張から、人類愛を身につけることは決してできない。祖国愛から人類愛に移るには、閉じられたものから開かれたものへと逆行する一種の飛躍が、社会的人間から神的人間への、生物進化にも似る大変化が必要であった。たとえば、イエス・キリストはその飛躍を一身に体現した人であると、ベルクソンは考える。イエスがもたらした「人類愛」という情動の火は、共同体を超えて次々と燃え広がった。その事実がなければ、人類はすでに今日まで生き延びてはいないだろう、というわけである。[前田 2011:186-187]

前田は、ベルクソンにとっても内村にとっても「イエスとは、対象のない愛それ自体によってすべてを救い上げる人、神の本質を備えた「明確なる人格」(内村) そのものである」(前田 2011:187) という。しかし共同体への愛と人類愛を区別したベルクソンの考え方に対して、内村は「己の両親、師、郷土、祖国といったものへの愛が、そのままキリストの、すなわち神の人類愛に繋がることを信じている」[前田 2011:187] とする⁽⁸⁾。ただし「内村が己のなかに保持し続けた祖国や郷土は、ベルクソンの言うような生物・社会学的な共同体とは、またまったく異なった性質を持っていたらう」[前田 2011:187] とし、それらは「彼のなかで「基督教」を接ぎ木した信仰と道德の太い台木だったのである」[前田 2011:187-188] ととらえている。本稿の第二章と第三章では、

この台木、すなわち日本の精神がキリスト教と類似しており、それが「開いた社会」[ベルクソン 1953:37] への可能性を持つことを考察した。内村は、自分は日本のため、日本は世界のため、世界はキリストのため、すべては神のためという信条を生涯持っていた。また「自国を以て万国の中華と見做すものは亦国民中最も弱く最も進歩せざるものなり」[内村 1981:286]という認識を示し、「各国民にも是に特別なる天職あつて全地球の進歩を補翼すべきものなり」[内村 1981:286] として世界各国の価値を対等だとする見方に立ち、それぞれの国が神の国の実現に向けて役割を持つと考えていた。こうした考えやベルクソンの考えとのつながりから、内村は日本を「閉じた社会」[ベルクソン 1953:37]ではなく、それを破る社会にするためにキリスト教が必要だと考えたとすることも許されるであろう。ベルクソンはまた次のようにも述べている。

哲学者たちは、すべての人間は兄弟であり、賢者は世界の市民である、と宣言した。しかし、こうした言明は考えられた理想の、恐らくは実現不可能と考えられた理想の表明であった。偉大なストア派の誰ひとりとして、皇帝だった人でさえ、自由人と奴隷との間の、ローマ市民と野蛮人との間の、垣根を低くすることを可能だとは考えなかったこと、を我々は知っている。権利の平等と人格の不可侵性を含む普遍的同胞愛の思想が活動的になるためには、キリスト教の到来まで待たねばならなかった。
[ベルクソン 1953:95]

そしてこのように述べた後、「感嘆に値する賢者たちによって人々にただ提示されただけの理想と、愛の使命を帯びて世界のなかに放たれ、愛を呼び起こした理想とは別物である」[ベルクソン 1953:95]とするのである。これは内村が、武士道はこの世の一道徳に過ぎないとしてその価値をスパルタの道徳やストア派の信仰と同じだとみなしたことと重なる。内村はスパルタの道徳やストア派の信仰によって、リクルゴスやキケロのような人物を産むことができるが、カール大帝やグラッドストーンのような人物は産み出せないとしている。内村はカール大帝やグラッドストーンの優れた業績がキリスト教に由来すると考えていた⁽⁹⁾。そして内村にとってそのキリスト教の最も顕著な特徴とは、キ

リストの十字架による贖罪という愛の行為によって人々を「赦された罪人」〔内村 1995:182〕とすることであった。『代表的日本人』において描かれる日本は、支配者階級と庶民との間にある情愛の細やかさや一見価値のないような者にも愛情を注ぐ点でストア派よりはキリスト教に近いと内村は考えていたと思われる。しかしそれはあくまで自らの共同体内に限られるものであり、そのままでは他の共同体に対しても同様なものになりうるとはいえない。またたとえ細やかな情愛があるとはいえ、それは「権利の平等や人格の不可侵性を含む普遍的同胞愛」〔ベルクソン 1995:95〕といった自覚にもとづくものではない。人間は神の前では皆等しく「赦された罪人」〔内村 1995:182〕であると悟ることによってのみそれを自覚し、自らの共同体のみではなく全人類のことを考えることができるというのが内村の考えであったと思われる。当時の西洋社会はキリスト教国であるにもかかわらずその重要な要素である＜利他主義＞や＜精神主義＞が忘れられ、各国が個人や自己の属する社会の保存のみに汲々とする「閉じた社会」〔ベルクソン 1953:37〕に陥っている状態にあった。内村はこのような状態に対して、日本にはまだキリスト教が受容されてないにもかかわらず武士道というものがあり、それは自らの所属する共同体内に限定されているとはいえキリスト教に類似した＜利他主義＞や＜精神主義＞といった道徳的要素が備わっていることを示した。つまり優れてはいるが「祖国愛」〔前田 2011:186〕にとどまっている武士道を「人類愛」〔前田 2011:186〕に飛躍させ「開いた社会」〔ベルクソン 1953:37〕とするためには、「対象のない愛それ自体によってすべてを救い上げる」〔前田 2011:187〕キリストそのものを知ることが不可欠ではある。しかしそれが実現されれば、日本が開かれることでキリスト教精神を忘れ去っている西洋諸国の覚醒を促す契機となり、世界全体が「開いた世界」〔ベルクソン 1953:37〕へと向かい神の国に近づくと考えたのである。

結論

本稿では、本作品が単に日本と西洋の優劣を超えて世界の現状を打開する日本の可能性を説くものであることを実証することを目的とした。そのために①

二つの版を比較して、一貫しているものは何なのか②それは何に由来するのか③世界の現状を打開するためにはその日本由来のものに加えて何が必要とされているのかについて考察した。その結果①については、日本とキリスト教には西洋近代の利己主義や物質主義に反するものとして＜利他主義＞や＜精神主義＞という共通点があるがゆえに、日本はキリスト教を受け入れる下地を持つとされ、それが西洋近代に勝る日本独自のものとしても積極的に評価されていること②については日本にキリスト教を受け入れる下地となっているのが「武士道」であり、それは武士階級に限るものではなく、日本全体に広く普及する精神としてとらえられていること③については日本の「武士道」にキリスト教が接ぎ木され、人間は神の前では皆等しく「赦された罪人」[内村 1995:182] であるという意識が日本人全体に共有されることで「権利の平等や人格の不可侵性を含む普遍的同胞愛」[ベルクソン 1953:95] が定着し、世界の現状を打開する力になるとされていることが明らかになった。

これらのことから、本作品において内村はまず日本人の優れた点を論じているがそこには世界に向けて開かれた視点があるといえる。つまり本作品においてなぜ内村がこれだけ西洋近代を批判しているのかというと、それはキリスト者としての内村が、キリストの教えを見据えた上で世界の現状に対して抱く憂いとその流れをなんとかして食い止めたいとする願いの表れと見るべきであろう。本作品において語られる日本の美点としての「武士道」は、西洋近代における利己主義や物質主義とは逆に＜利他主義＞や＜精神主義＞を説くものであった。したがって本作品には、西洋近代に支配されない日本の美点を確認し、そこにキリスト教が接ぎ木されることで、日本こそが西洋近代の悪を克服し世界をキリストの説いた神の国へ向ける力になるとする思いが込められているといえる。

註

- (1) J・F・ハウズ 2015:147、前田 2011:100、亀井 1977:99 など。
- (2) この他の翻訳では、鈴木俊郎訳と鈴木範久訳を参照した。
- (3) 内村は、義戦として旧約聖書のギデオンが神の命のもと攻め込んでくるミデアン人と戦ったこと、ギリシア人がペルシアの大軍を破りその支配を免れたこと、三十年戦争においてグスタヴス・アドルフ・ハスがカトリックの圧制と戦ったことをあげている。[内村 1982:104-105]
- (4) 明治 15 年に朝鮮において日本の指導による改革に反対する壬午軍乱が起こった。

- その後清の朝鮮に対する指導権が一段と強化され、日本は朝鮮から一歩後退した。
- (5) この序文については鈴木俊郎訳が内村の意図をより反映していると思われるので引用にはそちらを用いた。なお引用に際しては旧字を新字に改めた。
 - (6) 内村は1902（明治35）年頃までは、義戦を認める立場をとっていたが、1903（明治36）年6月の「戦争廃止論」において戦争絶対廃止論をとるようになる。そして同年9月の「平和の福音（絶対的非戦主義）」では、旧約聖書において戦争が是認されるのは、人間がそれを罪惡と覚るまで神がそれを是認したにすぎず、キリストが現れて平和の福音を述べたことによって戦争は絶対的に惡事と認められたというになる見解をとるようになる。
 - (7) 内村の武士道の自尊独立についてはさらに検討が必要であるが、それは今後の論文で扱う予定である。
 - (8) この前田の見解に対して、筆者は内村がベルクソンと同様「祖国愛」と「人類愛」には断絶があるにとらえていたという見解をとる。そして内村にとってその断絶をつなぐものがキリストによる罪の贖いであったと考えるが、この問題についてはまた改めて論じたい。
 - (9) カール大帝（742-814）は、西ローマ帝国の皇帝で広大な帝国の支配を確固たるものとし、キリスト教、教育、農業、芸術、工芸、商業を推進した。その治世はカロリング・ルネッサンスとして知られる。グラッドストーン（1854-1930）については、内村が1898（明治31）年7月に「グラッドストーン氏の死状と葬式」という作品を発表している。そこではグラッドストーンがイギリスのキリスト教的な政治家であったことが述べられている。

引用文献

- 内村鑑三 1941『代表的日本人』鈴木俊郎訳 岩波書店
 内村鑑三 1968『代表的日本人』内村美代子訳 日本ソノサービスセンター
 内村鑑三 1995『代表的日本人』鈴木範久訳 岩波書店
 内村鑑三 1981『内村鑑三全集第1巻』岩波書店
 内村鑑三 1982『内村鑑三全集第3巻』岩波書店
 ベルクソン 1953『道德と宗教の二源泉』平山高次訳 岩波書店
 前田英樹 2011『信徒 内村鑑三』河出書房新社

参考文献

- 内村鑑三 1938『余は如何にして基督信徒となりし乎』鈴木俊郎訳 岩波書店
 内村鑑三 1980-1984『内村鑑三全集全40巻』岩波書店
 内村鑑三 1984『内村鑑三英文論説翻訳篇上』亀井俊介訳 岩波書店
 鶴木奎治郎 1987「カーライル・エマソン・内村鑑三—『代表的日本人』における伝統と変容—」『比較思想研究』14:107-118
 亀井俊介 1977『内村鑑三—明治精神の道標—』中央公論社
 川端伸典 2001『内村鑑三の回心をめぐって『二つのJ』の意味したもの』『日本の哲学』2:96-110
 菅野覚明 2004『武士道の逆襲』講談社
 共同訳聖書実行委員会訳 1987『聖書 新共同訳』日本聖書協会
 鈴木範久 1988『代表的日本人を読む』大明堂
 鈴木範久 2012『内村鑑三の人と思想』岩波書店
 鈴木範久 2014『道をひらく 内村鑑三のことは』NHK出版
 デイビッド・クリスタル編 1997『岩波＝ケンブリッジ世界人名辞典』日本語主幹 金子雄二 富山太佳夫 岩波書店
 長野美香 2013『内村鑑三『代表的日本人』』『日本の思想第一巻「日本と日本思想」』岩

波書店

船曳建夫 2010 『「日本人論」再考』 講談社

J・F・ハウズ 2015 『近代日本の預言者内村鑑三、一八六一～一九三〇年』 堤稔子訳

教文館

若松英輔 2017 『代表的日本人：永遠の今を生きる者たち』 NHK 出版

若松英輔 2018 『内村鑑三 悲しみの使徒』 岩波書店

<ABSTRACT>

**About *The Representative Men of Japan*: From the
viewpoint of the intersection between Japanese
morality and Christianity**

SATŌ Aki

UCHIMURA Kanzō (1861-1930) published *Japan and the Japanese* in 1894, during the Sino-Japanese War. In 1908, after the Russo-Japanese War, he republished it in shortened form as *The Representative Men of Japan*, a selection of critical biographies of five men, namely SAIGŌ Takamori, UESUGI Yōzan, NINOMIYA Sontoku, NAKAE Tōju and Nichiren. Uchimura supported the Sino-Japanese War as a war for justice, but by the time of the second war was he had become a pacifist. It is said that the reduction in the contents of the work to only five biographies reflects this major change in his thought.

Previous studies have understood this work as an attempt to demonstrate not only that Japanese morality is not inferior to Christianity, but also that, on the contrary, Japanese morality was indeed more 'christian' than Western morality, although it had been viewed by the West as inferior because it was part of an inferior civilization. In contrast, this study attempts to demonstrate that, although Uchimura emphasized the good points of Japan in contrast to the West, he did more than simply compare the value of their moral systems, but rather warned of growing dangers in the global situation and suggested that Japan had the ability to resolve them. In my view, he made the following points, which can be seen in both works.

- 1) The altruistic spirit and mind-over-matter nature of the Japanese national character are similar to Christianity, and both serve as critical foils for the egoism and materialism of the modern West.

- 2) The Japanese national character derives from Bushidō and its spirit is widespread in Japan.
- 3) Bushidō alone is not enough for modern Japan, but making up for this deficiency with elements of Christianity will open up a new possibility for the country. This possibility is that the Japanese will learn to think not only of their own community but also all of the world's people by realizing that each man is a "sinner forgiven by God."

Westerners were only intent on their individual or their national profit at that time, although they were Christian. Therefore this work should be interpreted as showing the uneasiness of Uchimura as a Christian about the world situation and his desire to change it somehow, based on an understanding of the teachings of Christ. In other words, this work shows his wish that if Christianity could be grafted onto "Bushidō" as a Japanese virtue unflinched by modern Western evils, Japan would obtain the power to overcome them and bring the world close to the Kingdom of God.